

〈研究ノート〉

## 「わが孫たちの経済的可能性」に見られるケインズの誤算と慧眼

中 矢 俊 博

### 1. はじめに

筆者は15年前の2009年に、ケインズの論考「わが孫たちの経済的可能性」(*Economic Possibilities for our Grandchildren*, 1930) を分析したことがある。その論考は、読む人を魅了する内容を持つものであり、その時の記憶が今でも鮮明に残っていて離れることはなかった。この論考には、当時流行していた悲観論を打ち壊し、悲しみに沈んだ人々を鼓舞すると同時に、将来に対して前向きにさせる表現で溢れていたのである。まさにケインズの真骨頂が示されていたように思われる(中矢俊博, 『ケインズ経済学研究』(同文館出版, 2018年) 所収)。拙稿の内容を要約すれば、次のようである。

まず、「はじめに」では、この講演が『大衆の反逆』で有名なオルテガが理事を務めていたマドリードの学生館で1930年に行われたこと、ケインズが抱いていた芸術の大衆化が「ケンブリッジ芸術劇場」の建設計画などによって実現しつつあったこと、ケインズ研究者であった浅野栄一氏の『ケインズの経済思考革命』(勁草書房, 2005年)での鋭い指摘に触発されて執筆されたことなどが表明されている。次いで本論に入り、1. 100年後の経済水準の予測(短期分析ではなく長期予測)、2. 二つの相反する極端な悲観論と一般的な悲観論(極左の暴力革命と極右の何もしないこと、進歩ではなく衰退の始まり)、3. 歴史の回顧 {①古代から1580年頃まで(田舎の風景)、②1580年頃から1930年頃まで(科学と技術の飛躍的進歩)、③複利の力(350年で10万倍)、④経済問題の解決(生活水準が8倍)}、4. 人生の真の問題(愛と美と知)、5. 人間の必要と道徳律の変化(絶対的な必要と似非道徳律の排除)、6. 神経衰弱(裕福な妻たち)、7. 目的意識的な人間(貪欲と高利と警戒心)、と続く。「おわりに」では、ケインズの示した経済的至福(economic bliss)が、人口の調節、戦争などの回避、科学や技術の進歩、資本蓄積率の上昇など4つの要因によって規定されていることを指摘し、経済問題が解決した暁には文化と芸術がわれわれの周りに溢れ、真に人間として生活するにふさわしい状態が訪れるであろう、と結んだのである。

今回の研究ノートでは、今一度この素晴らしい論考を読み直し、ケインズが意図し

たことが実際に実現したのかを考えてみることにした。否、ケインズが意図したことが何故実現しなかったのかを考える、と言った方が良いのかもしれない。ケインズのような天才であっても、彼が考えていたことが実現しない、といった誤算はありうるのである。われわれの現代社会は、確かにケインズの当時より豊かにはなったが、ケインズが心配したことが顕在化しているように見える。豊かになっても、富裕層はケインズが考えたような愛と美と知には関心を示さず、ヴェブレンが提起した顕示的消費（conspicuous consumption）に満足しているし、一般大衆の方も実質賃金が上がらず、ただ生活に追われるだけで善く生きることが出来ないでいる。

この研究ノートは、2024年3月8日に名古屋大学で開催されたケインズ学会中部部会での報告を元に、参加者各位から提起された様々な問題を受け、筆者なりに修正を施したものである。参加した皆さんに心からの感謝を捧げたい。なお、あり得べき誤りはすべて筆者に帰することは言うまでもない。

## 2. ケインズのロジック

さて、筆者なりにケインズ「わが孫たちの経済的可能性」のロジックを辿ってみると、次のようになるように思われる。1929年に大恐慌が起こり、多くの人々がこれからの生活に不安を抱えている時に、ケインズは何も心配する必要はない、と説得を始める。これからは科学技術の飛躍的進歩と大きな資本蓄積の時代であるので、100年後には孫たちの生活水準は8倍に達するに違いない。豊かな社会になると、ケインズが考えている人生の目的が重要性を持つようになる。それらは、人を愛すること、美を愛でること、真理を追求することである。将来は、徳と健全な英知に満ちた、善い生活が待っている。

ところで、豊かな社会は、残念ながら、ケインズが好んだ宗教心を持ち伝統的な徳のある人ではなく、彼が嫌った貪欲で高利を求める「目的意識的な人々」(the purposive man)の活動によってしか実現しない。シェイクスピアが「マクベス」で3人の魔女たちに言わせた様に、「きれいはきたなく、きたなくはきれい」(fair is foul and foul is fair)なのである。目的意識的な人々は、遠い将来の結果（累積的な富の拡大）により強い関心を持っているので、「科学や技術的発明」(science and technical invention)と「複利の原理」(the principle of compound interest)により、100年後の孫たちの時代には豊かな社会が訪れるに違いない。ケインズは、このような豊かな社会の実現を単に希望していただけではなく、強く信じていたのである。

しかし、ケインズが望んだ豊かな社会では、人々は労働時間の短縮と余暇時間を手に入れるが、少しばかり不安が残る。富者たちはさらなる金儲けに邁進し、自己顕示欲を実現すべく贅沢三昧に過ごす一方で、やることの無い妻たちは「神経衰弱」

(nervous breakdown)に陥り、一般の大衆は余暇時間を有効に使えないかもしれない。ケインズの考えていた人生の目的、すなわち人々と交わる喜び、美を享受する楽しみ、知の追求が実現するとは限らないのである。しかしながら、「もう少し経験を積み、われわれは新たに発見された自然の賜物を、富者たちの現在の利用法とはまったく異なった方法で利用することになるし、富者たちとはまったく異なった人生設計プランを独力でうちたてられるようになる、と確信している」(I feel sure that with a little more experience we shall use the new-found bounty of nature quite differently from the way in which the rich use it today, and will map out ourselves a plan of life quite otherwise than theirs.), とケインズは明言した。大恐慌のような厳しい時代にあっても、ケインズは100年後の将来に、楽観的な見通しを持っていたのである。

### 3. 『説得論集』(Essays in Persuasion) への所収

さて、この論考はケインズが取締役会長をしていた『ネーション・アンド・アシーニウム』誌に1930年10月11日と18日の2回に分けて掲載され、翌1931年には「ここに収めたのは、12年にわたる不吉な叫び—かつて一度も事態の成り行きに対して時宜に適った影響を与えることができなかったカサンドラにも似た一予言者の凶事をつげる叫びである」(Here are collected the croakings of twelve years—the croakings of a Cassandra who could never influence the course of events in time.), という印象的な書き出しで始まる『説得論集』に収められる。その序文でケインズは、「西欧世界はすでに、心身ともにわれわれを疲弊させている経済問題を、一段低い二義的な位置にまで引き下げうる資源と技術を持っている。ただし、それらを使いこなせる組織を創造することが出来たならばの話ではあるが。」(the western world already has the resources and the technique, if we could create the organization to use them, capable of reducing the economic problem, which now absorbs our moral and material energies, to a position of secondary importance.), と述べた。

さらに、「これらの論文の著者は、その不吉な予言の叫びにもかかわらず、経済問題がその本来おさまるべき目立たない地位に退く日がそう遠くはないということ、そして心と頭の領域がわれわれの真の問題、すなわち人生と人間関係の問題、創造と活動と宗教の問題によって占められ、あるいは占められ直すであろうということを、依然として希望しかつ信じている」(the author of these essays, for all his croaking, still hopes and believes that the day is not far off when the economic problem will take the back seat where it belongs, and that the arena of the heart and head will be occupied, or reoccupied, by our real problems—the problems of life and of human relations, of creation and behavior and religion.), と続けたのである。

このようにケインズは、顕著な人口増加や大きな戦争が無ければ、目覚ましい技術の進歩や幾何級数的な資本の成長の故に、ヨーロッパでは100年後に経済問題が解決するか、解決に近づくものと信じていた。繰り返しになるが、「複利の原理」に忠実に奉仕する「目的意識的な人々」が科学の進歩を通じて人類に豊かさをもたらすだろうし、そうなれば1日当たり3時間の労働や週当たり15時間の労働が実現し、似非道德律からも解放されるに違いない。また、経済問題が解決された暁には、われわれの精神が人生や人間関係の問題、創造と活動と宗教の問題によって占められることを固く信じていたのである。

#### 4. ケインズの誤算・その1 第二次世界大戦（戦争の技術進歩）

以上が、ケインズの論考「わが孫たちの経済的可能性」が教える内容である。筆者は、この論考を久しぶりに読み直して見て、ここには当時の不安な人々を鼓舞する点で、実に素晴らしい予言がちりばめられている、と思わずにはいられなかった。しかしながら、ケインズのこの楽観的な予言は、いくつかの点で実現しなかったように見える。何故だろうか。

さて、技術が進歩し生産性が改善されると、確かに富は増大する。ケインズは、経済的至福が人口の調節、戦争などの回避、科学や技術の進歩、資本蓄積率の上昇など4つの要因によって規定されている、と明言した。ヨーロッパ諸国では、人口は制御されており、技術の進歩や資本蓄積率の上昇は、ケインズの考える通りとなった。しかし、『平和の経済的帰結』でも述べていたように、戦勝国がドイツへ多額の賠償金請求を行った結果として、ドイツ国民の不満を受け止めるべく独裁的な政権が誕生する。その様にして誕生したヒトラー政権は、自らの正当性を主張するために再びヨーロッパを戦場へと変えていったのである。

それ故に、ケインズの経済的至福構想には、この第二次世界大戦勃発はおおきな痛手となったに違いない。経済的成功は、戦争や内乱が無いことが前提とされていたからである。さらに重要なことは、ケインズが主張した科学技術の発展や文明の進歩は、戦争に使われる殺戮兵器の進歩をも促すことである。大砲、戦車、爆撃機、ミサイル、レーダー、潜水艦、原子爆弾などの技術の発展は、国家同士の壮絶な殺し合いを可能にした。戦争は、よく言われているような無知や野蛮、宗教対立だけで起こる訳ではない。独裁者が手にする発達した技術が戦争を促す面も多分にあるものと思われる（ダロン・アセモグル&サイモン・ジョンソン、*Power and Progress*, 鬼沢忍・塩沢通緒訳、『技術革新と不平等の1000年史』上・下（早川書房、2023年））。

筆者は、これがケインズの誤った第1の点であると考えている。現在でも、ロシアの独裁者は、昔の夢を実現するために他国に侵略し、ウクライナの国民と領土を奪おうと

している。また、北朝鮮の独裁者は、ミサイルや核兵器の開発に余念がなく、それらはいずれ使用されるに違いない。中国の独裁者は、毎年軍事力を飛躍的に拡大し、隣国である台湾を威嚇し続けている。世界は、科学技術の発展で豊かになると同時に、戦争技術の急速な進歩で破滅へと向かっているのかもしれない。

## 5. ケインズの誤算・その2 絶対的な必要

ケインズは、バレエや演劇を愛で、絵画や古書を蒐集し、オペラやオーケストラなどのクラシックを愛好した。絶えざる好奇心から真理を探究し続け、大量の著作（『ケインズ全集』全30巻）を残した。まさに、彼は人生を歌うことができた人であった。しかし、多くの人はケインズのように歌うことは出来ない。彼らは、たとえ技術や資源の成長からもたらされる余暇時間を持ったとしても、精神的な不調に悩まされるだけかもしれない。また、ケインズが尊敬していた「ケンブリッジ経済学の始祖」であるマルサスが明言していたように、「小人閑居して不善をなす」(Idleness is the mother of all evil) ので、一般の人々は余暇時間を持て余すと、善い方ではなく悪い方に傾くかもしれない。もっとも、人々の賃金は上がっておらず、物価を考慮すると実質的には下がっていることから、生活に追われる状態が続いているので、そういう心配はないと言っても良い。

さて、ケインズは想定していなかったように見えるが、衣・食・住といった絶対的な必要についても、この100年間でその構成部分は大きく変化してきたのである。昔は、自動車やテレビなどは生活必需品では無かったし、パソコンやスマホはまだ生まれていなかった。さらに、それらを獲得するための費用に関しても、ケインズの時代とは違って、かなり負担が増えてきているように思われる。ケインズは、彼自身が考えていた絶対的必要が満たされたならば、人々は人生や人間関係の問題、創造と活動と宗教の問題に向かうと信じていた。贅沢ではなく質素な生活を好んだケインズは、まさに知足（足るを知る）の人であったが、現代ではなかなか彼のように慎ましく生活することは難しいように思われる。

ケインズを尊敬したスキデルスキーが提起した基本的価値に関しては、R. & E. スキデルスキー、*How much is enough?* (村井章子訳、『じゅうぶん豊かで、貧しい社会』(筑摩書房、2013年))を見ると分かるように、1) 各自の健康、2) 生活の安定、3) 毎日の仕事、4) ある程度の財産、5) 自然との調和、6) 家族や友人、7) 余暇の充実といった7つの要素で構成されている。これらは、ケインズの絶対的必要を考慮に入れた、実に説得力のある充実したラインナップであるし、まったくその通りであると筆者も考える。

しかし、現在のところ、どの程度それらが実現しているのか。多くの人は健康に不



安を抱え、生活は物価高の影響で安定せず、毎日の仕事で忙しく働いている。老後を送る資産についても多くの人が心配し、自然との調和や家族関係も決して充実しているとは限らず、余暇などはまったく無いに等しい。第一級のケインズ伝記作家であるスキデルスキー、{Keynes, 村井章子訳, 『ジョン・メイナード・ケインズ』上・下 (日本経済新聞社, 2023年), *What's Wrong with Economics*, 鍋島直樹訳, 『経済学のどこが問題なのか』 (名古屋大学出版会, 2022年)} が主張した基本的価値の実現は、まだまだ先のこともかもしれない。

## 6. ケインズの誤算・その3 優越の欲求 (顕示的消費)

ケインズは、絶対的な必要 (absolute needs) だけでなく、相対的な必要 (relative needs) や優越の欲求 (the desire of superiority) についても指摘している。しかし、あまりそれらに関心を持っているようには思われない。もともと、彼自身は投資行動によりかなり裕福であったが、先にも指摘したように優越の欲求をあまり持つことなく、生活自体は実に質素だったようである。ケインズの趣味であった絵画や古書の蒐集は、他者への見せびらかしとは異なっているだろう。ケインズは、目的意識的な人々が人類に豊かさをもたらす面だけに注力し、彼らの生活態度や実際の行動を過小評価していたのかもしれない。人間は、豊かになったとしても、残念ながら「財産として所有するような貨幣愛」 (the love of money as a possession) を持ち続け、優越の欲求を追究する存在であろう。金儲け (money-making) 本能や見栄が彼らを刺激するのである。

ケインズは、「みじめな失敗」 (failed disastrously) と呼び、「前途はなんとも気の減入のようなものだ」 (the outlook is very depressing) として当時の富裕層の行動を批判していたが、ソーンステイン・ヴェブレン (*The Theory of the Leisure Class*, 高哲夫訳, 『有閑階級の理論』 (筑摩学術文庫, 1998年)) も指摘したように、彼らの行動は他人への見せびらかしや優越感、権力の追求、高額な贅沢品の購入など、目を覆いたくなるものばかりである。彼らが消費するものは、相手に自分のすごさが伝わるものでないと駄目なのである。富裕層は数億円もする高級マンションに住み、ベンツなどの高級外車を乗り回し、高級なバッグや時計を身に着けることで満足し、ケインズが期待した人生や人間関係の問題、創造と活動と宗教の問題といった精神的に高度な領域に遊ぶことは出来ていないように見える。現代では、自家用飛行機や大型ヨットの所有、世界一周旅行、さらには月への旅行など、富裕層の行動はとどまるところを知らない。

## 7. ケインズの誤算・その4 富の偏在（経済格差）

技術が進歩し生産性が改善されると、確かに富は増大するし、人々の生活水準もそれなりに上昇することは間違いない。だが、増大した富の分配はどうなるのか。ケインズは、この「わが孫たちの経済的可能性」（1930年）の中では、富の分配の不平等についてまったく述べていない（1936年の『一般理論』最終章「一般理論の導く社会哲学に関する結論的覚書」ではかなり言及している）。トマ・ピケティ（『21世紀の資本』（みすず書房、2013年））も指摘しているように、富は一部の人に独占されるだけで、一般の人々には回っておらず、大きな経済格差を引き起こしている。幾何級数的に増大した富を獲得する資本家と算術級数的な賃金しか得ない労働者では、格差は拡大するばかりである。富の成長は、人々の全般的な経済問題の改善に役立っていないのではないか。当時の富裕層であった地主や資本家も莫大な富を所有していたが、それと比べても、現在のICTやAI企業（アマゾン、グーグル、アップル、メタ、マイクロソフト、Netflix、エヌビディアなど）の経営トップの資産は格段に多く、まったく信じられない金額である。

例えば、トマ・ピケティとルカ・シャンスルが主催する「世界不平等研究所」（本部：パリ）では、2022年に「世界不平等レポート」を作成している。その中で、「経済成長の果実は公平に分配されているか」という問いに対して、否と答えている。なぜなら、上位1%の富裕層の所得は全体の19%を占め、上位10%では全体の52%になると言う。資産の方はもっと極端で、富裕層の上位0.01%（52万人）の富が全体の11%を占め、上位10%の富は何と全体の76%を占めている、と言うのである。一方で、下位50%の資産は全体のたった2%を占めているだけで、とも言っている。2008年のリーマンショックや2020年から始まったコロナ禍以降、世界の富は著しく偏在してきているのが現状である。増大した富をより平等に分配するシステムを考え、それらを実行する必要がある。そうしないと、ケインズが考えた人々の文化的な生活は絵に描いた餅に過ぎなくなるに違いない。

## 8. ケインズの誤算・その5 人口の飛躍的な増大

何回も示しているように、ケインズは経済的至福が人口の調節、戦争などの回避、科学や技術の進歩、資本蓄積率の上昇など4つの要因によって規定されている、と明言した。ケインズの議論は、ヨーロッパが中心となっているものと思われるので、全世界に議論を広げることは彼にとってはフェアではないかもしれない。ヨーロッパでは、ケインズの言う通り、人口の調節は旨く行っていた（この90年間で5億人から7億人）ように思われていたからである。しかし、第2次世界大戦は、全世界を巻き

「わが孫たちの経済的可能性」に見られるケインズの誤算と慧眼

込んだ戦争であったので、人口の議論も全世界を見る必要があるのではないかと。さて、世界全体の人口を見てみたら、信じられない勢いで増大してきているのが良く分かる。

総務省統計局の資料によると、ケインズが「わが孫たちの経済的可能性」を執筆した当時の1930年には、世界の人口は約20億人であった。その後、世界の人口は著しく増え続け、1940年には約23億人、1950年には約25億人、1960年には約30億人、1970年には約37億人、1980年には約44億人、1990年には約53億人、2000年には約61億人、2010年には約70億人、2020年には約78億人となった。1930年から2020年までの90年間で、世界の人口は20億人から78億人へと、約4倍に増大したのである。

これがどのくらいすごい数字かは、少し前の時代を振り返って見ればよく分かる。今から約270年前にあたる1750年の世界人口は約8億人であった。また、約170年前の1850年には約12億人となっている。先にも紹介したが、約70年前の1950年には世界人口は約25億人ということである。1750年から1850年の100年間で、約8億人から約12億人へと1.5倍となった世界人口は、1850年から1950年の100年間で約12億人から約25億と2倍となった。過去の世界人口はゆっくりとした増加を維持していた。しかしながら、第2次世界大戦後の世界人口は、1950年から2020年の70年間で約25億人から約78億人へと約3倍に増大したのである。

世界人口基金（United Nations Population Fund）が発行している『世界人口白書2023』を見ると、2022年11月15日に世界人口は、とうとう80億人を突破したようである。これは、ケインズ時代の人口の丁度4倍である。ケインズが名付けた「マルサスの悪魔」は再びわれわれを襲うようになった、と言わなければならない。このような人口増加を前にしては、食えることすら満足に満たされない人々がたくさんいるものと思われる。飢えた人々にいかにして十分な食料を供給することができるのか。われわれ人類の英知が試されている。ケインズなら、どのような解決策を考えるのだろうか。

## 9. ケインズの慧眼・その1 1930年から2030年までの技術進歩

これまでは、ケインズの誤算について取り上げてきたが、ここからはケインズの慧眼についても言及しておきたい。ケインズが実際に生きた時代は、1883年から1946年の62年間であった。その時代にすでにあった技術は、電気、ガス、電車、電信・電話、ラジオ、テレビ、自動車、飛行機、プラスチックなど、われわれにもよく知られている技術である。それに加えるならば、電子望遠鏡、FMラジオ、ナイロン、ポリエステル、ビデオテープレコーダー、ハードディスクドライブ、レーザー、桌上計算機などであろうか。

彼の死後、パソコン関係の技術が急速に進み、フラッシュメモリー、ワードプロセッ



サー、DVD、ウインドウズ95、USBメモリー、スマートフォン、アイパッド、などの新製品が次々に現れる。また、原子力関係の技術も格段に進歩し、胸部レントゲン撮影や放射能療法などの医学的利用もあるにはあるが、必要以上に原子爆弾、原子力発電所、原子力潜水艦などが作られているように見える。さらに、ロボットや人工知能（AI）の進歩は、類い稀な（Singularity）な発展を遂げており、2007年度内閣府の「イラストで見る20のイノベーション代表例」には、2025年に期待される技術がイラストで示されている。ここには、2007年1月の日本学術会議報告書である「科学者コミュニティが描く未来の社会」も含まれている。

それらを見てみると、1. カプセル1錠で寝ながら健康診断、2. 高齢者でも丈夫な身体・認知症も激減、3. ガン・心筋梗塞・脳卒中を克服、4. 走れば走るほど空気を綺麗にする自動車、5. 日本が育てる世界の環境リーダー、6. 不毛の砂漠に緑のオアシス、7. ヘッドホンひとつであらゆる国の人とコミュニケーション、8. 家に居ながらサイバーワールド上で日本を体験、世界を体験、9. 家事からの解放——家に1台の家庭ロボット、10. 世界中どこでも財布を持たずに生活OK——キャッシュレス・ワールド、11. 折りたたみ式ディスプレイ、12. 食物の安全情報を一目でキャッチ、13. 頼れる仲間、製造現場での頭脳ロボット、14. センサネットで守る子供の安全、15. 衝突できない車、16. 東京—成田15分、東京—大阪50分、17. 土砂・洪水災害を予測、被害を劇的に減少、18. 地震発生後の15秒緊急対応により犠牲者が激減、19. 200平米200年住宅、20. ロボットが月旅行、といったものである。

内閣府が提示した以上の技術は、既に実用化されている物もあるが、2030年までに実用化できないものも含まれていよう。しかしながら、これの技術が実用化されるならば、人類は健康や余暇などの面で長足の進歩を遂げるに違いない。ケインズの民生用の技術進歩に対する予言は誠に慧眼であった、と言っても良いであろう。

## 10. ケインズの慧眼・その2 1930年から2030年までのGDP成長

ケインズは「わが孫たちの経済的可能性」の中で、資本の幾何級数的成長を提起した。すなわち、幾世代のあいだ休眠していた「複利の力」が、16世紀からその機能を再生し、350年（1580年から1930年まで）にわたってたゆみなく続けられる。イギリスの対外投資額は、ドレークが持ち帰った時の1ポンドが、毎年3.25パーセントの複利で着実に運用されたことから、現在では10万ポンドとなった（350年で10万倍）。これが偉大な複利の力である、とケインズは強く主張したのである。

以前にも述べたように、彼は「進歩的な諸国における生活水準は、今後100年間に現在の4倍から8倍の高さに達する、と私は予言しておこう。われわれの現在の知識に照らしてみても、何ら驚くべきことではない。これよりもはるかに大きな進歩の可能

「わが孫たちの経済的可能性」に見られるケインズの誤算と慧眼

性を予測しても、何ら無分別なことではないであろう」(I would predict that the standard of life in progressive countries one hundred years hence will be between four and eight times as high as it is today. There would be nothing surprising in this even in the light of our present knowledge. It would not be foolish to contemplate the possibility of a far greater progress still.)、と断言した。

さて、1930年から100年の間に、実際に実現した資本蓄積はいかなるものであったか。筆者が手に入れた世界銀行のデータ (World Bank national account data, 2022) によると、世界のGDPは、1960年に1.38兆ドル、1970年には3.01兆ドル、1980年は11.5兆ドル、1990年は22.9兆ドル、2000年は33.9兆ドル、2010年は66.71ドル、2020年は85.26兆ドル、2022年には101.83兆ドルとなっているので、この60年の間に限っても約80倍となっている。生活水準は、物価の上昇も考慮に入れる必要があるし、生活に必要な物資もかなり高度化しているので比べることは難しいかもしれないが、約10倍には達しているのではないかと思われる。ケインズが予言したように、「進歩的な諸国における生活水準は、今後100年間に現在の4倍から8倍の高さに達する」というのは、決して大袈裟な予想ではなかった。ケインズの資本の成長に関する予言も慧眼であった、と言っても間違っていない。

## 11. ケインズの慧眼・その3 悲観論からの脱却

ケインズは、「わが孫たちの経済的可能性」の冒頭に、「われわれは今まさに、経済的悲観論という悪質な発作に悩まされている。人々の次のような言葉を耳にするのも珍しくない、すなわち、19世紀を特徴づけたあの巨大な経済進歩の時代はもう終わり、今や生活水準の急速な向上は少なくともイギリスにおいては—そのテンポを低下させ始めており、われわれを待ち受けているこれからの10年間は、より一層の繁栄というよりも、繁栄の衰退ということになる可能性が大である、という言葉がそれである」、と書き始めていた。

良く知られている様に、この論考は大恐慌の最中に世に出された。だから、ケインズが掲げた楽観論は、大恐慌の惨状を前にした時、無頓着で無神経なものと思われたかもしれない。一般的に言って悲観論は、提起した人の絶望的な考え方が人々の行動を呼び起こし、危機意識を喚起するのに適しているように見えるからである。しかし、ケインズは、実に果敢に、このような悲観論に攻撃を加えた。その当時の悲観論はまったくの間違いである、と強く否定したのである。すなわち、「世界中を覆っている不況、世界中に収束されない欲望が溢れているのに失業が存在しているという最悪の異常事態、われわれが犯した惨めな誤りなどが、表面に現れない所で進行している事態に対して—すなわち事態の趨勢の正しい解釈に対して—われわれを盲目にしている。とい

うのは、現在世界中に大騒ぎを起している悲観論の二つの相反する誤りは、いずれもわれわれが生きている間にその間違いが明らかにされるからである」、と。

ケインズは、「その二つの相反する悲観論の誤りとは、暴力的変革以外にわれわれが変われる途はないほど事態は悪化していると考える革命家たちの悲観論と、われわれの経済的社会的生活のバランスは自らの意思によって達成されたものではないのであえてどのような実験も企てるべきではないと考える反動家たちの悲観論とである (both of the two opposed errors of pessimism are the pessimism of the revolutionaries who think that things are so bad that nothing can save us but violent changes, and the pessimism of the reactionaries who consider the balance of our economic and social life so precarious that we must risk no experiments.)」, と続けたのである。

また、『ネーション・アンド・アシーニウム』誌に1930年12月20日と27日の2回に分けて掲載されケインズの論考「1930年の大不況」(『説得論集』に所収)の中にも、「生活の物質的問題の解決をめざすわれわれの進歩の速度はそれほど遅くはない。われわれは、以前と変わらず総ての人に高い生活水準—ここで高いというのは、例えば20年前と比較して高いという意味である—を提供することができるし、近い将来もっと高い生活水準をさえ提供できるようになるだろう」、という楽観的な叙述がある。さらに、「いついかなる時にも天然資源と人類の創意は、まったく従前どおり豊かで生産的であろう。機械は、たんに混乱の結果、故障したに過ぎない。しかし、自動車の磁石発電機 (magneto) が故障したからといって、すぐにもがたがた馬車に舞い戻ることになるのか、自動車の運転はもうおしまいだとか臆断するには及ばない」、と論じている。

ケインズが見せた悲観論への攻撃は、とても素晴らしい慧眼であったと筆者は考える。希望の欠如は人類にとって致命的である。ケインズは、根拠のない楽観主義ではなく、その原因を可能な限り正しく理解することが出来る人であった。ロシアのウクライナ侵略、イスラエルの過剰なハマス攻撃、北朝鮮のミサイル発射、中国の台湾問題など、現代でも独裁者の暴挙に対する悲観論は大手を振っているように見られる。しかし、われわれは過剰な悲観論に惑わされることなく、ケインズが「わが孫たちの経済的可能性」で示した楽観主義の様に、希望を持って前へ進んでいかなければならない。

## 12. おわりに ケインズの名言

今回、ケインズの論考「わが孫たちの経済的可能性」を再読し、筆者なりにこの研究ノートを作成して見て、彼の論考には名言が数多く存在している、と思わざるを得

なかった。否、彼が書いたすべての文章は、どの部分をとってみても鑑賞に堪えうる名言ばかりだ、と感じたのである。ケインズは、まさに文章の達人であった。本稿を終えるにあたって、それらを紹介しておくこととしたい。

[1] しかし何よりもまず、経済問題の重要性を過大に評価し、経済問題で仮定されている様々な必要のために、もっと大きくより恒久的な重要性を持った他の諸問題を犠牲にしてはならない。それは、歯科医師と同じように、専門家たちの問題であるべきなのだ。経済学者が歯科医たちと同じ位置にとどまって、控えめで有能な人とみなされるようになることができたとすれば、それはなんとすばらしいことであろう (But, chiefly, do not let us overestimate the importance of the economic problem, or sacrifice to its supposed necessities other matters of greater and more permanent significance. It should be a matter for specialists—like dentistry. If economists could manage to get themselves thought of as humble, competent people, on a level with dentists, that would be splendid!)

[2] 富の蓄積がもはや高い社会的重要性を持たないようにになると、道徳律 (code of moral) に大きな変化が生じることになる。われわれは、200年にわたってわれわれを悩ませてきた多くの似非道徳律 (pseudo-moral principles) から解放されることであろう。この似非道徳律のために、われわれはもっとも忌み嫌うべき人間性の一部を、最高の徳だとして崇め奉ってきたのである。われわれは金銭的動機の真の価値をあえて評価できるようになるだろう。

人生を楽しむ手段、人生を実体のあるものとする手段としてではなく、財産として所有するような貨幣愛は、まさにその理由であるからこそ、多少いまいましい病的なものとして、精神病専門医に押し付けるような、半ば犯罪的で病的な性癖の一つとして、見なされるようになるだろう (The love of money as a possession—as distinguished from the love of money as a means to the enjoyments and realities of life—will be recognized for what it is, a somewhat disgusting morbidity, one of those semi-criminal, semi-pathological propensities which one hands over with a shudder to the specialists in mental disease.)

このようになると、資本蓄積を促進するうえできわめて有益であるが故に、それ自体いかに忌み嫌いかつ不公平なものであろうとも、現在どんな犠牲を払っても維持されている富と経済的賞罰との配分に影響を与えるようなあらゆる種類の社会的ならびに経済的慣行を、ついに自由に放棄することができるようになる。

[3] かくて、人間の創造以来はじめて、人間は真に恒久的な問題、すなわち経済上

の切迫した心配からの解放をいかに利用するのか、科学と複利の力によって獲得される余暇を賢く、快適で、かつ幸福に過ごすにはどのように使えばよいのか、という問題に直面するであろう（Thus for the first times since his creation man will be faced with his real, his permanent problem—how to use his freedom from pressing economic cares, how to occupy the leisure, which science and compound interest will have won for him, to live wisely and agreeably and well.）。

[4] 重大な戦争と顕著な人口の増加がないものとすれば、経済問題は100年以内に解決されるか、あるいは少なくとも解決のめどがつくであろう、というのが私の結論である。これは、経済問題が一将来を見通すかぎり—人類の恒久的問題ではないことを意味する。

これがなぜ驚くべきことなのか、と諸君は問うかもしれない。それが驚きであるのは—未来ではなく過去を考えれば—経済問題、すなわち生存のための闘争がこれまで常に、人類にとって—ただ単に人類だけでなく、もっとも原初的な形態の生命の始原以来、生物界全体にとって—第一義的な最も切迫した問題であったからである（Why, you may ask, is this so startling? It is startling because—if, instead of looking into the future, we look into the past—we find that the economic problem, the struggle for subsistence, always has been hitherto the primary, most pressing problem of the human race—not only of the human race, but of the whole of the biological kingdom from the beginnings of life in its most primitive forms.）。

[5] われわれは、少なくとも100年間、自分自身やどの人に対しても、きれいはいたなく、きたなくはきれいであると偽らなければならない。なぜなら、きたないものは有用であり、きれいなものはそうではないからである。貪欲や高利や警戒心は、今しばらくはわれわれの神でなければならない。なぜならば、そのようなものだけが経済的な必要というトンネルから、われわれを陽光のなかへと導いてくれることができるからである（For at least another hundred years we must pretend to ourselves and to everyone that fair is foul and foul is fair; foul is useful and fair is not. Avarice and usury and precaution must be our gods for a little longer still. For only they can lead us out of the tunnel of economic necessity into daylight.）。

[6] 不朽不滅の約束を宗教の核心と本質の中に最もよく組み込むことのできた民族が、複利の原理にも最も大きく寄与してきたこと、しかも人類の様々な制度のうちで最も目的意識的なこの制度を特に好んでいるということは、おそらく偶然のことではない。



したがって、われわれは宗教と伝統的な徳に関するもっとも確実な原則のうちいくつかのものに向かって、自由に立ちもどることができる、と私は思う。すなわち、貪欲は悪徳で、高利の強要は不品行で、貨幣愛は忌み嫌うべきものであるし、また明日のことなど少しも気にかけないような人こそ、徳と健全な英知の道をもっとも確実に歩む人である、といった原則にである。われわれはもう一度手段より目的を高く評価し、効用よりも善を選ぶことになる (I see us free, therefore, to return to some of the most sure and certain principles of religion and traditional virtue—that avarice is a vice, that the exaction of usury is a misdemeanour, and the love of money is detestable, that those walk most truly in the paths of virtue and sane wisdom who take least thought morrow. We shall once more value ends above means and prefer the good to the useful.)。

われわれはこの時間、この一日の高潔で上手な過ごし方を教示してくれることができる人、物事のなかに直接の喜びを見出すことができる人、汗して働くことも紡ぐこともしない野の百合のような人を尊敬するようになる。

[7] 目的意識とは、自分の行為自体の質や、その行為が環境に直接及ぼす影響よりも、自分の行為が生じさせた遠い将来の結果に、より強い関心を持っていることを意味する。「目的意識的な人」は、そのような関心を先へ先へと時間を先送りすることで、自分の行為に見せかけだけで錯覚に満ちた不朽性を手に入れようとしている (Purposiveness means that we are more concerned with remote future results of our actions than with their own quality or their immediate effects on our environment. The ‘purposive’ man is always trying to secure a spurious and delusive immortality for his acts by pushing his interest in them forward into time.)。

[8] 記録が残されている最も古い時代—それは、例えば紀元前2000年までさかのぼることができる—から18世紀の初めに至るまで、地球の文明の中心地に生活していた普通の人の生活水準には、大きな変化はなかった。浮き沈みは確かにあった。悪疫や飢饉や戦争の襲来。その合間の黄金時代。紀元1700年に至る4000年間に、他の時期より向上を見せた時期が若干あったとしても、それはおそらく50パーセント—せいぜいのところ100パーセント—を越えなかったであろう。このような緩慢な進歩率、というより進歩の欠如は、2つの理由—重要な技術改良の顕著な欠如と、資本蓄積の不足—によるものであった。

[9] 前史時代から比較的最近の時代まで重要な技術的発明がなかったことは、まっ

たく驚くべきことである。真に重要であり、しかも近代の初頭の世界に存在していたほとんどすべてのものは、歴史の黎明期にすでに人類によって知られていた。すなわち、言葉、火、われわれが今日飼っているのと同じ家畜、小麦、大麦、ぶどうとオリーブ、鋤、車輪、オール、帆、皮革、リンネルと毛織物、煉瓦と壺、金や銀、銅や錫や鉛、そして鉄が紀元前1000年までにこのリストに加えられる、銀行業、経国の才、数学、天文学、宗教、このようなものがそれである。われわれがこれらのものを初めて入手するようになったのは何時なのか、その記録はない。

[10] 当世風の言葉を使えば、一般的な「神経衰弱」を予想せざるをえない。われわれは、すでに私がいわんとしていることを多少とも経験している。つまりイギリスやアメリカでは、富裕な階級の妻たち、すなわち不幸な婦人たちの間ではすでにありふれたものとなっている神経衰弱がそれである。彼女たちの多くは、財産があるために、伝統的な務めや仕事を奪われている。彼女たちは経済的必要という刺激を奪われると、料理や洗濯や繕いものに十分な楽しみを見出すことが出来ないにもかかわらず、それら以上に楽しいことを見出すことも全く出来ないのである。

[11] われわれを苦しめているのは老人性リウマチではなく、速すぎた変化による成長期神経痛、一つの経済時代からもう一つの経済時代との間の再調整に伴う痛みなのである。要するに、技術的効率の上昇テンポの方が、労働力吸収の問題に対するわれわれの処理能力のテンポよりも急速に生じてきたこと、生活水準の向上は少しばかり速すぎたこと、世界の銀行や通貨制度は、利子率が均衡状態に達するために必要とされるテンポで低下するのを妨げてきたのである（We are suffering, not from the rheumatics of old age, but from the growing-pain of over-rapid changes, from the painfulness of readjustment between one economic period and another. The increase of technical efficiency has been taking place faster than we can deal with the problem of labour absorption: the improvement in the standard of life has been a little too quick; the banking and monetary system of the world has been preventing the rate of interest from falling as fast as equilibrium requires.）。

[12] 今のところ、このような変化の速さそのものがわれわれを傷つけ、解決の困難な問題を惹起している。進歩の先頭に立っていない諸国の悩みが比較的に深刻である。われわれは、新しい病気に苦しめられている。一部の読者はその病名をまだ耳にしていなくてもいいかもしれないが、今後何年かのうちに頻繁に耳にすることになろう。その病名とは技術的失業（technological unemployment）である。これは、われわれが労働の新たな用途を見つけ出すテンポを凌ぐほどの速さで、労働利用を節約する手段を発見

「わが孫たちの経済的可能性」に見られるケインズの誤算と慧眼

したことに起因する失業を意味している。

[13] しかしながら、この論文を書いた私の意図は、現在や近い将来について検討することではなく、自分自身を短期的な見方から解き放ち、未来に飛翔することである。合理的に見て、今後100年間にわれわれの経済生活の水準は、どれ程に達すると予想できるであろうか。われわれの孫たちの経済的可能性は、どのようなものであるのだろうか (My purpose in this essay, however, is not to examine the present or the near future, but to disembarass myself of short views and take wings into the future. What can we reasonably expect the level of our economic life to be a hundred years hence? What are the economic possibilities for our grandchildren?)。

[14] 確かに、人間の必要 (needs) は飽くことを知らないように見える。しかしその必要は、二つの種類に分かれる—われわれが仲間の人間の状態の如何に関わらず感じると言う意味で、絶対的な必要と、その充足によって仲間たちの上に立ち、優越感を与えられる場合に限って感じるという意味での相対的な必要、この二つである。第二の種類の必要、すなわち優越の欲求 (the desire of superiority) を満たすような必要は、実際に飽くことを知らぬものであろう。なぜなら、全般の水準が高まれば高まるほど、この種の必要はなお一層高くなるからである。

しかしこのことは、絶対的な必要については当てはまらない。—この種の必要が十分満たされたため、われわれは非経済的な目的に対してより一層の精力をささげる道を選ぶに至るような時期が、おそらくわれわれの誰もが気づくよりもずっと早く到来するであろう (But this is not so true of the absolute needs—a point may soon be reached, much sooner perhaps than we all of us aware of, when these needs are satisfied in the sense that we prefer to devote our further energies to non-economic purposes.)。

[15] 経済的至福という目的地に到達するまでの足跡は4つのものによって規定されることになろう。—すなわち、人口の調節能力、戦争および内乱を回避する決意、当然科学の仕事である様々な問題の管理を科学に委ねる自発性、生産と消費の差額によって決定される蓄積率、の4つである。このうちの最後のものは、他の3つが与えられれば、おのずと容易に解決される。

一方、自分たちの運命の準備をおだやかに進め、目的意識的な活動と同じように生活の技術を高め、その実験を試みることは、何らの害ももたらさないであろう (Meanwhile, there will be no harm in making mild preparations for our destiny, in encouraging, and experimenting in, the arts of life as well as the activities of

purpose.)。

『南山経済研究』掲載論文の中で示された内容や意見は、南山大学および南山大学経済学会の公式見解を示すものではありません。また、論文に対するご意見・ご質問や、掲載ファイルに関するお問い合わせは、執筆者までお寄せ下さい。

(中矢俊博, 経済学会名誉会員 : E-mail: nakayat@nanzan-u.ac.jp)